

みんなの
ための
学校長会に

茨城県 学校長会広報

第249号

発行者
茨城県学校長会
会長 小野瀬 繁子
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933-1
教育プラザいばらき内
☎ 029-269-1300
FAX 029-269-1304

特集

新年度に備えて — 我が校の課題 — 危機管理体制の整備と学校安全の確保



目次

- 表紙写真に寄せて……………1
- 特集1
「新年度に備えて
我が校の課題」……………2
- 課題「コロナ禍での『新しい
学校づくり』」……………5
- 特集2
「危機管理体制の整備と
学校安全の確保」……………6
- 提言二題……………8
- ブロック研修会から……………9
- 特別寄稿「今こそ『すべては
子供たちのために』」……………10
- ひばり……………12
- 図書紹介……………13
- 梅のかおり……………14
- 市町村教育委員会と学校長会……………16

地域とともにある学校の 実現を目指して

高萩・秋山小

関根 紀夫

毎年冬の時期に、PTA主催の地区対抗駅伝大会を行います。コロナ禍ではありましたが、今年度も規模を縮小して、五三回大会を実施しました。子供たちの走る姿で、地域を元気にすることができました。

また、学校運営協議会が発足し、秋山中学校とともにコミュニティ・スクールとなつて三年目。保護者や地域の方が、日常的に学校を訪れ、授業の支援や見守り、ちいさなコンサートを開催するなど、地域ぐるみで子供たちを育てようとしています。

特集 1

新年度に備えて —我が校の課題—

「笑顔あふれる学校を目指して」

東茨城・桂小 園部 守

本校は、坏小、北方小、岩船小が統合してできた、創立一〇周年の小学校である。今年度は九二名の子供たちと一八名の教職員が、組織目標「『できた』を増やす」に向けて、自然豊かな環境の中で楽しい学校生活を送っている。次年度に向け、本年度の成果と課題を全職員で整理しながら、次のことを新たな課題として付け加え取り組んでいきたい。

二 地域と共にある学校
保護者や地域住民との連携においても、新型コロナウイルスの影響は大きく、本年度予定していた「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」の立ち上げが難しくなっている。本校では、登下校、学校行事、学習活動に保護者や地域住民の方々に協力していただく機会が多い。また、地域の行事に本校の子供たちがお世話になることもある。地域の力を借りて子供たちを育てる必

一 表現力の向上
本年度は「自分の思いや考えを分かりやすく伝える児童の育成」に向け、国語科を中心に校内研修に取り組んできた。しかし、新型コロナウイルス防止のために学習形態が大きく変わり、子供同士の学び合い活動を十分に行うことができなかった。それでも、子供たちの伝える力が確実に向上してきているのは、教職員の努力の成果である。対話を通して学習内容の理解を深める活動は、子供たちの学びには大切なものである。次年度も感染防止に努めつつ、子供たちの表現力の向上のために校内研修（授業改善）に取り組んでいく。

本校は、東海村の南東、村松海岸近くに位置する児童数九七名の学校である。保護者や地域は学校に協力的で、「地域と共にある学校」として、多くの学校行事を協働で実施している。今年度は児童はもとより教師、保護者、地域の方々が楽しいと実感できる教育活動の推進に取り組んできた。次年度は、特に学習への意欲を高め、他者と協働して課題を解決する力の育成へ



要件は、今後ますます重要になってくる。学校が地域住民等と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子供たちを育む「地域と共にある学校づくり」を推進していくための、組織づくりに取り組んでいく。

明るく元気で、 仲良く楽しい学校を目指して

那珂郡・照沼小 菊地 義光

本校では、次の二つの項目を重点に改善のマネジメントを進める。
一 仲間と共に考え、課題を解決する力を高める。

本校では児童のつばやきや発想を生かし課題を解決する学びのスタイルとして、黒板の前に車座に座り、互いの考えや意見を述べ合い、話し合う「照小スタイル」を推進してきた。本年度は、コロナ禍で密を避けるため、照小スタイルではなく、電

子黒板で仲間の考えや意見を共有し、学級全体で話し合う学習を進めている。次年度はさらに、一人一台のタブレットを使い、自分の考えを言葉、図や絵・写真、式や表・グラフで相互に伝え話し合い、課題を解決する力を高める学習を推進する。

二 多様な仲間とよりよい人間関係を築く力を高める。

本校では六年間同じ級友と生活するため、児童は互いを思いやり助け合うことができる。また農業体験や世代間交流など、地域の方との活動で、感謝する心や自己有用感は育ってきている。しかし、限られた人数での小学校生活のため、中学校で出会う多様な仲間との人間関係づくりに苦労する。そこで、次年度は、近隣小学校との遠隔・合同での授業や体験活動、中学生との交流会など、多くの児童生徒と関わる機会を数多く設け、多様な仲間とよりよい人間関係を築く力を高めていく。



「西金砂神社田楽舞」を生かし、郷土への誇りと愛着を育む

常陸太田・金砂郷小 武石 洋

本校は常陸太田市の中西部に位置し、全校児童九三名の小規模校である。令和四年度に金砂郷地区三校（本校、郡戸小、久米小）の統合を控え、ここに来てその諸準備が本格的にスタートした。統合前年となる来年度は、特に「心さわやかプラン」地域の伝統文化を生かし、体験を通して豊かな心を育てる」を重視し、伝統文化の継承や地域の方々との交流から、まちの魅力を認識するとともに、郷土への誇りと愛着を育む学びの場を充実させたいと考えている。

一 地域の伝統文化「田楽舞」

本校の通学区には、九世紀初めに建てられた西金砂神社がある。この神社に伝わる県指定文化財・無形民俗文化財「西金砂神社田楽舞」は、約一二〇〇年前から今日まで受け継がれ、地域の人々が大切に守っている伝統芸能である。コロナ禍で一年延期された小祭りが、天下泰平や五穀豊穰を願って、令和四年三月に開催される予定である。

二 人材活用と縦割り班活動

本校では、総合的な学習の時間に「田楽舞活動」を行っている



田楽舞 第1段：四方固め

三年生から六年生までの児童が、全四段で構成される舞の意味を学び、地域人材の田楽師や上級生から舞い方を教えてもらい、太鼓や笛の音に合わせて協力しながら練習に取り組んでいる。各段のリーダーとなり、自分の納得できる舞を目指す六年生は、その成果を毎年秋に開催する「ふじやま集会」等の行事で披露している。これまでの練習の成果を発揮して、堂々と舞う六年生からは、最高学年としての自覚と郷土への誇りともいうべきものが伝わってくる。

本校の特色ある活動「田楽舞活動」が、新生統合小学校においても、新たな伝統として脈々と引き継がれるようにと願いを込めて準備を進めていきたい。

小中一貫校としての強みを生かしたチーム高松を目指して

鹿嶋市南東部に位置し、全児童二〇四名の学校である。保護者や地域の方は教育に関心が高く協力的である。小中一貫校として三年目となった今年度は、コロナ禍にあり交流活動等制限せざるを得なかった。また次年度は、授業力ブラッシュアップ推進校（国語）でもあり、次の二つの項目を重点にさらなる改善を図っていききたい。

一 深い学びへの授業改善

今年度、授業力ブラッシュアップ研修ゼロ年として国語科の授業改善を進めてきた。校内研修支援による客観的な視点でのアプローチにより、主体的・対話的な授業改善を図ったが、深い学びに課題がある。

次年度は深い学びの視点から授業改善に臨む。具体的には、「読解を経由する記述力の育成」を主題とし「読んで書く力」を合言葉に、中学校の国語科担当教諭も加え全職員で取り組む。また読解力の育成に不可欠な学校図書を活用し深い学びに繋げていく。さらに「読んで書く力」を付けた児童を見取る指標を作

二 小中一貫教育の推進

今年度は、小・中学校合同で九年間を見通したグランドデザインを策定し、中学校と共通理解を図りながら進めてきたが、計画された交流活動や部活動ができず課題となっている。

今後は、中学校との乗り入れ授業による教科担任制をさらに

「地域とともにある学校」を目指して

土浦・土浦一中 酒井 宏之



古より城下町として繁栄してきた土浦。その土浦城跡の隣に土浦藩藩校「郁文館」の門が現存している。郁文門をくぐる土浦第一中学校がある。創立七四年。卒業生総数三万有余名。「歴史と伝統」の学校である。

現在、「地域とともにある学校」づくりを推進しており、新年度も次の二点を重点に実践する。

一 社会に開かれた教育課程

地域には多くの卒業生と支援団体が存在する。地域の方々の本校に対する愛着と想いは深い。卒業式や入学式等の行事で、全校生徒・教職員・保護者・地域の方々がともに声高らかに歌う校歌は、圧巻である。校長として、常に生徒には、「一中生としての自覚と誇りをもて」と伝えていく。生徒もそれを意識し、生徒会のスローガンとして掲げている。また、教育課程の中には、地域の教育力を位置付けた活動も多く導入している。さらに、今後は地域の人的・物

充実させ、九年間の成長を見据えた「高松スタンダード」を見直すことで、学習指導や生徒指導の一貫性を高め、中一ギャップの未然防止に努める。また、交流活動等は実施可能な形態を工夫し組織的・計画的に実践し、チーム高松で小中一貫教育をさらに推進していきたい。

資源を活用し、地域とともに子供たちを育て、よりよい社会を創る「社会に開かれた教育課程」の実現を目指していく。

二 地域とともに小中一貫教育

土浦市は、「土浦NEXTプラン」をもとに小中一貫教育を推進している。一貫校の子供たちと地域を交えた活動は、土浦の花火やキララまつりの後の「合同クリーン作戦」をはじめ、「合同地区懇談会」、「合同学校保健委員会」等が実施されている。さらに、今後は小・中学校と地域が、ともに子供たちを育てる体制を構築していく。

今年度はコロナ禍のため、行事等の中止や変更を余儀なくされた。本校の永遠の課題である「歴史と伝統」の継承。その実現のために、今年度は「Withコロナ」を念頭に置いて教育活動を精選し、さらに、「地域とともにある学校」を深化させたい。



「当たり前前」を問い直して「原点」を確認する

石岡・小桜小 中澤 正蔵

本校の課題は、気付く力や感じる力を高めること、そして、主体的に考え、行動する力を育むことである。

今年度は、問うことで、思いや考えを引き出し、自己を見つめさせ、真の理解を促すアウトプット型の学習指導・生徒指導を進めてきた。その結果、理由を述べたり、相手の様子を伺って言い方を変えたり、見通しをもったりする姿が増えてきた。

今年度も「今までの学習指導で真の学力は身に付くのか。」「今までの特別活動でよりよく生きる力は育つのか。」等という原点からの問い返しにしっかりと応えながら、次の二点を軸にして一歩前進を図っていく。

一 学びに向かう力を育むための授業改善

誰もがもっている向上心を引き出すことが学びに向かう力や育むうえで大切な要素となる。

そこで、改善のキーワードとして、「鯛(タイ)が泳ぐ授業」として、「調べてみタイ」「考えを聞いてみタイ」という状況を作り出す授業の研究を推進する。

現状の教材との出会わせ方や

思考を促す揺さぶり・問い返しの発問、理解状況や適性に合わせた学びの在り方等を、児童に軸足を置いて問い直すところから改善を図っていく。

二 よりよく生きる力を育むための特別活動の推進

自分たちの生活を振り返り、よりよくするための見通しを立てる過程で、気付く力や感じる力が高まってくると考える。

現状の係・委員会・当番・縦割り班等の活動が、「原点」で

自信をもって意欲的に取り組む児童の育成

常総・菅原小 齋藤 輝行

本校は、日本三天神の一社と数えられる大生郷天満宮近くに位置する、創立一三二年目を迎える学校である。児童数は九九名で、各学年単学級に加え、特別支援学級が三学級設置されている。

「よく学び、心豊かで、たくましい菅原っ子の育成」を学校教育目標として掲げ、自信をもって意欲的に取り組む児童の育成を目指し、次のことに取り

あるよりよく生きる力を育むものになっていくかを問い直す。そして、多様な人との関わりを通して、折り合いをつけたり、協働的に課題を解決したりしながら、人間関係形成力や社会参画に資する力を育んでいく。



たい見方・考え方、学習に適した思考ツール等を整理した単元構想図を作成し、教師が見通しをもって指導に当たっているが、思考ツール活用の利点を児童がもっと意識できるように、他教科における活用も図ってほしい。

二 特別支援教育の充実

児童が何事にも意欲的に取り組めるようにするために、自己肯定感や自己有用感を高める指導に努めている。今後も、障害の有無に関わらず、児童一人一人の困り感や教育的ニーズを把握して効果的な手立てを講ずること、児童が安心して生活できる環境を整え、学級を一人一人のよさを認め合いお互いに支え合える場としたい。児童数が少ないメリットを活かして、特別支援教育コーディネーターを中心に、ユニバーサルデザインや合理的配慮等についての研修を深め、学校全体で全児童を支援する体制を確立する。



課題



コロナ禍での「新しい学校づくり」

県学校長会副会長 栗原 恵子
(坂東・岩井一小)

新学習指導要領について中教審答申に示された「将来の予測が困難な時代」が、まさに小学校学習指導要領完全実施初年度から現実になろうとは、誰も予測しなかったと思う。コロナ禍で日常生活は一変し、今まで当たり前だった教育活動が行えなくなり、突然の臨時休校や学校再開後の感染症対策、教育課程の再編成などを余儀なくされた。子供たちの「主体的・対話的で深い学び」の実現のための学習活動には、かなりの制限が加えられた。

本校でも、三密を避けるべく行事を精選し、学習の遅れを取り戻すべく授業を淡々と進める毎日が続いた。子供たちの自主的・自律的な活動が難しい状態であったが、「何ができるか」を教職員と子供たちで模索して、運動会の代替の「スポーツフェスティバル」、「持久走大会」、オンライン会議システム（ミーティング）を利用した「人権集会」等を子供主体で実施した。これらの活動に向けて教師が黒子となり、子供

たちの活動を支えたことで児童は「自己有用感」をもつことができた。教職員も手応えを感じ、「やりがい感」に満たされた。コロナ禍により休校中の学力保証のためのオンラインによる学習などICT教育が脚光を浴び、今後の教育の必須アイテムとなったが、それと同時に、子供同士のかかわりの中で育つ力（社会性）の大切さに改めて気付かされた。坂東市の各小・中学校においては、平成二八年度より「魅力ある学校づくり」を掲げ「授業の中での人づくり」を実践している。学びの質への基盤づくりとして「心の居場所づくり」と「絆づくり」を進めている。すべての児童生徒の「心の居場所」となるよう、教師主導で児童生徒にとって自己存在感や充実感を感じられるような「安心安全な学校づくり」を目指している。同時に、すべての児童生徒の「絆づくり」の場となるよう、児童生徒が主体的に取り組む活動を通し、自らが「絆」を感じ取り、

紡いでいく「場と機会の提供」を行っている。コロナ禍の中、どんな取組が可能か児童生徒・先生が知恵を出し合って工夫しながら取り組むことは、より一層の社会力育成につながると考える。今年度も最終コーナーにさしかかった。各学校においては、組織マネジメントを生かして現状分析を行い検証をすすめる、次年度の経営の計画に着手していると思われる。当面は、第一に子供の安心安全を担保し、「予測が困難な社会を生き抜く力」を身に付けさせるべく、校長としての「新しい学校づくり」を描いていくことが大切だと考える。コロナ禍での未曾有の学校経営の体験は、新たな教育への示唆となりうるので、まず、今年度進めてきた新しい取組を精査し、熟考してゼロベースで再構築し次年度につなげる。その際、「働き方改革」の「キヤップ、カット、効率化」の推進を念頭にビジョンを描いていく。

学校づくりの視点としては、今までの教育活動の将来性と持続可能性が、子供たちが未来を生き抜くために必要なかどうかの判断基準で吟味し、「新しい学校づくり」に取り組んでいきたいと考える。

学力保障のためのUDXに向けてUDX上野小デジタルトランスフォーメーション

筑西・上野小 谷池 真彦

現在、新型コロナウイルスの感染が地球規模で拡大し、多くの人々が生存の危機と生活の困難に直面している。こうした時であるからこそ本校は、ICTを活用した教育支援システムと情報インフラを一新し、児童に学びの機会を確保するため、いち早く研究を開始した。今こそ、明野の若芽を象徴とする伝統と実績を誇る上野小学校の総力をもって、新時代を切り拓くときであると確信し、Society5.0に向けた教育内容・学習方法確立への新しい挑戦をはじめめる。

一 情報活用能力
本年度は、教師と子供たちがICTが生活に溶け込んだ「感覚」をつかみ、養うことを目標に経験を積んできた。その取組が認められ、日本教育工学協会から学校情報化優良校の認定を受けた。ICTを真に道具として扱うことを含めた情報活用能力の育成と、それが発揮されることによる各教科等における深い学びを実現する。

二 個別最適化
本年度は、興味・関心、国籍、障害等をはじめとする学習者の多様性を踏まえ、リアルタイム字幕機能やマルチメディアディジー教科書等を活用して、個人の学習者が最適な学びを享受できる学習支援を推進した。次年度に向けて、学級で共に学ぶことの意義や教師の役割を再確認する。

三 学校学習の枠を超える
本年度九月に協和特別支援学校とリモート交流・共同学習を実施した。クラウドツールによる協働の学び、遠隔合同授業の可能性を知ることができた。次年度は、多様化する学習ニーズに対応した教育のさらなる機会均等と質の保証に取り組む。Society5.0時代における「子どもを誰一人取り残さないUDX」を強く推進する。



特集2

危機管理体制の整備と 学校安全の確保

地域の力を生かした交通安全対策

東茨城・明光中 小林 伸朗

一 はじめに

本校の学区は、水戸市の南に位置し、東西約二〇km、南北約一〇kmと広く、自転車での登校率は九五%を超えている。

学区内には、国道六号が南北に走り、北関東自動車道（インターチェンジが一箇所学区内にあり）が東西に走っている。町道を幹線道路の裏道として使用している車も多く、決して広くない道を毎日スピードを出した車が行き交っている。そのような状況で生徒たちは安全面に注意しながら、毎日登下校している。このような環境で、地域の力を活用して事故の未然防止に努めている取組を紹介したい。

二 地域と連携した安全対策

（一）運転手の立場から見た交通安全教室

毎年春先には新入生を対象に交通安全教室が行われる。地域の自動車会社の協力を得て、実際に乗車した状態で自



転車走行のどのような点が危険かを確認するよう活動をしている。自分だけの判断でなく、自動車運転手の視線で感じたことを自己の運転に反映できるようにしている。

（二）写真やビデオを使った安全確認

地域の方から寄せられた情報を基に、危険箇所と思われる場所について、写真やビデオに撮り、オンライン会議システムを使い、全員が視聴しながら共通認識がとれるよう取り組んでいる。文章や図で示しながら説明するより、

より視覚的に意識することができ、効果を上げている。

（三）関係機関との連携による安全対策

茨城町では町教育委員会が中心となり、町の関係機関（道路建設課・町民協働課）の他、国土交通省常陸河川国道事務所、水戸警察署、県水戸土木事務所などが集まり通学路安全対策会議が執り行われている。この会議では学校だけで

は対応できない安全対策（道路拡張、横断歩道の設置、電柱の移設等）について話し合わせ、各機関の協力を得て改善が図られている。

三 終わりに

交通安全は、生徒一人一人の意識化、行動化が必要不可欠である。その力を伸ばすために、また力を伸ばせる環境を確保するためにも地域の力を得ながら今後も取り組んでいきたい。

危機管理体制の整備と学校安全の確保

〜地域防災訓練を通して〜

鹿嶋・平井中 米川 豊

本校は鹿嶋市の南東部に位置し東に太平洋鹿島灘、南に鹿島臨海工業地帯を臨む環境に位置している。地域との繋がりも強く今年度コミュニティ・スクール導入に向けた学校運営協議会が立ち上がった。学区が海岸に面しているため津波への防災意識が高く、毎年防災訓練実行委員会を中心とした防災訓練が実施されている。

一 防災訓練の組織

「地区の人々が安心して暮らせる地域づくり」を目的に、まちづくり委員、区長、自治会長、センター（公民館）、平井小、中学校、PTA、鹿嶋市、社会福祉協議会、消防団等で組織さ

れた「防災訓練実行委員会」が防災訓練を主催している。年二回の実行委員会の会議が開かれているが、それぞれの役割等を確認するため学校は教頭が出席し組織の役割を確認するとともに実施に向けた計画を学校に伝える役割を果たしている。主要内容である本部の設置、誘導体制、避難経路、避難場所、炊き出し等の確認を行い、職員共通理解のもと実施に向けた準備を進めていく。

二 避難場所としての体験と訓練

本校は、地域では高い位置にあるため、津波からの避難所になっている。地域とともに行う貴重な訓練となるため事前に避

難所としての役割と防災意識を高める授業を必ず行い参加できるようにしている。避難所では、大きく体験と訓練に分けられる。内容としては「体験」・消火訓練・体験・スモーク体験・AED講習・応急手当【訓練】・避難所運営訓練・ボランティアセンター立ち上げ訓練・炊き出し訓練等となっている。本校生徒の主な役割は、各訓練の補助的な役割であるが、特に炊き出し訓練への参加と地域の方への食料の手渡しは毎年恒例となっている。訓練を行う中で「自分も地域の一人として役立っているという実感がでてきた。」と感想を述べる生徒が年々増えてきている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、生徒の参加は控え、縮小された防災訓練ではあったが、本校校庭への避難訓練は例年通り行われた。今後は自分の身の安全を守るとともに、地域の住民として地域全体の安全を守る意識をもった生徒の育成に努めていきたい。



コロナ禍における 学校安全の確保

取手・桜が丘小 福井 朱美

令和二年度は、臨時休業から始まり、これまで経験したことのない不安なスタートとなった。通常の危機管理体制の中に「感染予防対策」をも考慮した

学校安全の確保が求められた。

一 「自分の身は自分で守る」

(一)安全教育の充実

感染予防策がわかっていても、児童が「リスク回避行動」をとらなければ意味がない。そのためにも、教育活動全体を通して、危険を予測し、自ら回避することができるような安全教育を大切にしている。例えば、六年生の国語では、防災ポスターを作る中で、台風に備えて「自分のできる事」を考え、実践につなげている。

(二)教職員の研修

教職員は安全教育の充実を図るとともに、危険等から児童の安全を守るために「状況に応じた確な判断や行動」が求められる。そのためにもマニュアルを活用した研修は効果的である。今年度は、「エビペンを使った実践研修」を行った。マニュアルどおりにはいかない「事例」を自分

たちで想定しながら、より実践的な研修を行うことができ

た。

二 コロナ感染予防対策の実践

(一)学級活動を通して

まず、分散登校時に各学級で「コロナ感染症を知る」学習を実施。養護教諭が作成した児童の実態に合った資料をもとに、「学校の新しい生活様式」を児童も教職員も確認した。学校再開後は、※「あいてますか」を合言葉に教育活動全体を通して、「自分の命を守る行動」を実践した。※「あい(間をあける)」「て(手洗い)」「まず(マスク)」「か(換気)」

(二)児童の心のケア



本年度から取手市で取り組んでいる「チーム指導」により、児童を担任一人だけではなく、複数の目で見守っている。現在の状況に不安を感じている児童の心のケアにもつながる取組である。実際には、①授業交換②給食時の担任交換③給食二人制など。少なくとも一日三人以上の目によ

コロナ禍における 危機管理と学校安全

結城・城西小 小河原 泰彦

新型コロナウイルスの感染拡大により、学校及び国民全体の生活が大きく変わった。現在、本校でも全員がマスクを装着し、手指の消毒やパーテーションの活用、座席の工夫でソーシャルディスタンスを保つなど細心の注意を払って生活している。

このような状況の中、①児童及び教職員の安全を確保する②学校と児童・保護者・地域社会との信頼関係を保つ③組織的かつ迅速な対応により学校を安定した状態にする、という学校の危機管理の目的を満たすために、以下の三点に取り組んでいる。

一 危機管理マニュアルの修正
と共通実践

今回のコロナの対応について

り、児童の困り感をいち早く見つけ、支援することで、安全で「安心できる学校」づくりにつなげていきたい。

経験したことのない状況の中教職員一同、「児童の安全・安心を守る」という決意のもと、同じベクトルで取り組むことが何より大事であることが改めて学んだ。

は、まず、保健主事を中心とした校内の学校保健委員会(感染症対策委員会)で問題点について話し合い、対応策を検討した。次に、具体的な実践事項を市内の健康教育部(自分が健康教育部長のため)でまとめ、更に、校長会・教育委員会等で検討していただき、市内の学校である程度統一した内容を、行動様式にまとめた。その上で自校化したものを新たに危機管理マニュアルに追加するとともに、全職員で研修を行い、共有して実践している。

二 保護者・地域社会との連携の強化

非常事態が起きた時に「学校はどのように対応するか、実際にどう対応しているか」を、

ホームページや学校便り等で保護者や地域社会に知らせ、安心して登校できる環境を作った。更に、行事等については、安全を最優先させた内容をPTAと協議していった。また、青少年育成結城市民会議等、地域の団体との連絡を密にとり共通理解を深めていった。

三 安全教育の充実

今回のコロナ禍での生活のよう「命を守る」ためには児童・生徒一人一人が自ら考え行動・実践していくことが重要となる。日頃より「自分の命は自分で守る」ということを意識させ、実践的な訓練や日常の様々な場面で考えさせることで安全への意識が高まってきている。

感染防止対策に追われる日々ではあるが、この原稿が掲載される頃には、新型コロナウイルスへの対応が落ち着いて、以前にも増して学校に子供たちの笑顔が戻っていることを願っている。



提 言 二 題

PTA活動にあたり

常陸太田市PTA連絡協議会
会長 荷見 靖



令和二年度、常陸太田市PTA連絡協議会の会長を務めさせていただいております。荷見靖と申します。日頃より校長先生をはじめ、各学校関係者の皆様には、PTA活動に多大なるご理解とご協力をいただき、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

これまでの私のPTA活動としては、一会員として奉仕作業や運動会等への参加程度の関わりしかなく、組織の仕組み等は勉強不足でした。そのような状況で初めてのPTA会長と市P連会長という大役を仰せつかり、戸惑いの中でのスタートでした。

は二五六九名と小規模組織です。主な活動内容は例年、指導者研修会や防犯活動部会の開催、市長・教育長との懇談会や女性ネットワーク委員会の支援を行ってまいりました。しかし、予想外の新型コロナウイルス感染症の影響ですべての事業を中止せざるを得なくなり、コロナ禍においては、密を避けるため通常の役員会の開催も難しく、今年度の事業をどのように展開させていけばよいのか、悩む日々が続きました。

そのような状況でも、各単P会長や先生方と電話やグループライン等で連絡を取り合い、貴重なご意見や知恵を出していただいたことは、非常に心強く感じられました。

前述のとおり、本年度の市P連の事業はすべて中止となり、今まで当たり前のように行われていた活動が制限される中ではあります。我々はより一層子供たちに寄り添い、安心して学校生活を送ることができる手助けをしなければなりません。その一例として、七月に東北地区P連と連携して「新型コロナウイルス

イルス感染拡大防止に関するアンケート」を行い、学校や子供たちが抱えている問題等の把握に努めたところです。また、教育委員会からコロナ対策の考え方等について話を伺うなど、コロナ禍の今だからこそ浮かび上がってきた課題に気付くことができました。

コロナと共に過ごしたこの一年の活動は、本来の機能を十分に発揮できず、不完全なものになってしまいました。新たなPTA活動の形を考えるよい機会になりました。少子化の影響もあり、会員数は年々減少傾向にあります。誰のための活動なのかを常に考え、子供と共に成長していきたいと思えます。

PTA活動を通じて

潮来市PTA連絡協議会
会長 浅利 和寿



令和二年度、潮来市PTA連絡協議会の会長を務めさせていただいている浅利和寿と申します。日頃より校長先生をはじめとする各学校関係者の皆様には

PTA活動に多大なるご理解とご協力をいただきこの場をお借りして御礼申し上げます。

例年、潮来市PTA連絡協議会としては地区の指導者研修会、地域への行事等の支援、年四回程度の役員会、総会、そして一番大きな行事として親睦球技大会に取り組んでおります。球技大会においては約三〇〇名の参加者のもと会員間の親睦を図ることができ大いに盛り上がる行事となっております。

さて令和元年度末からの新型コロナウイルスの猛威のせいで、通常通りの学校生活やPTA活動を行うことができていません。臨時休校に始まり、卒業式や入学式の縮小、行事の中止など集まるのがなかなかできない状況でした。

令和二年度のPTA活動は何も行わないのが最大のPTA活動となつてしまいました。PTA活動を始めたとき自分の子供が在籍している小学校は各学年単学級だったので子供が卒業するまでに必ず役員を何かやらなければならず、それなら最初にやつてしまえと思いい活動を始めました。仕事などの都合をつけるのPTA活動は大変だと思つたり面倒くさいと思いつつながら活動でしたが、活動を通じていろいろな方々との出会いがあつ

たり先生方との距離が縮まった。何より子供たちの学校での様子をよく知ることができて楽しく活動をすることができました。

コロナ禍においてなかなか例年通りの活動ができませんが、制限された中での新たなPTA活動というものがあるかと思えます。皆で知恵を出し合い、よりよい活動が行えればと思つています。少子化が進み学校の統廃合が進んでいる中、いつの時代においても変わらないのは子供たちの明るい未来だと思えます。仕事や家事の時間を割いての活動は大変かとは思いますが、子供たちが安心、安全に、楽しく学校生活を送れるようにPTA活動に務めていきたいと思えます。



ブロック研修会から

新しい時代を拓く、心豊かな日本人の育成

水戸・赤塚中
川又 宏文

今年度の中央ブロック校長研修会は、十月十五日（木）「新しい時代を拓く、心豊かな日本人の育成」のテーマのもと、駿優教育会館を会場に一五七名の会員の参加を得て開催することができました。

本年度はコロナ禍の中での開催であることから、グループ協議をなくし、講演会のみを行いました。講演にじっくりと耳を傾け、校長としての職能を高め、学校経営の充実に資することを目的として開催しました。

講演会の講師として、大阪大学名誉教授、教育学博士である小野田正利先生をお招きし、「複雑化する保護者対応トラブル」学校としてすべきこと、してはいけないこと（校長向け）という演題でご講演をいただきました。小野田先生は「学校現場に元気と活力を！」をモットーに、保護者の無理難題要求や学校近隣トラブルなどをテーマに、現場に密着した研究活動を展開されています。ステージに置いたホワイトボードにキーワードを掲示し数多くの事例を

挙げながら講演が進みました。

☆いじめ問題Ⅱ保護者対応トラブル

☆親も子供も学習している学ばない教師

☆本を読み！思考しろ！行動しろ！

☆いじめと判断してもすべてが指導を要する場面とは限らない。

☆記録を取る。

☆苦情・クレームをトラブルに発展させない。

☆人生の三割は、クレーム対応

☆対応するときの力加減は七〇%

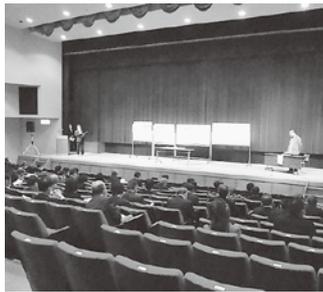
☆子供対応と保護者対応を分離する。

☆親をリスペクトする。

☆一〇分間は黙って聴く。

☆心は折れるものだ。復元力を大切に。

☆定年までお元気で。定年後も健康で。



などのキーワードが特に心に響きました。

参加者の皆様から「理論に基づいた実践的な対応を聴くことができ素晴らしい講演会であった。学校現場の困り感を整理して話していただき勇気づけられた。グループ協議なしでも充実した研修会になった。」との感想が多く寄せられました。

結びに、開催に当たりご協力をいただいた中央ブロック校長会連絡協議会評議員・研究推進委員の皆様、当日の係を担当してくださった常陸大宮市・太子町の皆様には、改めて心より感謝申し上げます。

新たな時代を拓く、創意と活力に満ちた学校経営

北茨城・中郷中
花園 浩

東北ブロック学校長協議会は、十月十五日（木）に常陸太田市交流センターふじを会場に、「新たな時代を拓く、創意と活力に満ちた学校経営」の研究主題のもと、七九名の会員が参加し、講演会とグループ協議による研修を行いました。

協議会に先立ち、四月の総会が中止になったことから新会員二一名の紹介をし、温かな雰囲気の中開催されました。開会行事では、来賓の茨城県北教

育事務所長佐藤正一様からご指導をいただきました。

○講演会

本年度は、働き方改革の新たな視点から、講師を一般社団法人日本シエアハウス協会理事の響城れい様に依頼し、「仕事力を鍛える 片付け術」を演題にご講演をいただきました。

学校は、清潔と信頼を伝える強力な「メディア」であるという職員指導への新しい視点から「校内美化五つの法則」による整頓・モノを捨てる・清潔に保つ極意など実践的で興味深い講話でした。会員からはこれまでと切り口が違い参考となったとの声が聞かれました。

○グループ協議

昨年度までの提案発表に基づく研究協議を改善し、学校経営力の向上を目的に、小グループによる情報交換を行いました。テーマは、「各校の課題解決に向けた取組と中間検証に基づく今後の学校経営」とし、レポートは作成せず、会員が自校のグランドデザインを持参し、特色ある学校経営の取組に関して学校評価結果を踏まえながら情報交換しました。

グループは、小中毎に地区、校長経験年数を踏まえて編成し、初任者と経験豊かな会員を組み合わせることで率直に学び合える協議としました。また、時間確保から、グループ代

表者の発表をやめ、代わりにアンケートに感想を記入し、事後に共有することにしました。他校の校長の話が聞けて大変勉強になった、もう少し時間が欲しかったとの声が聞かれ、有意義な時間となりました。

○会員アンケートより
講演は参考になった 八〇%
グループでの情報交換は良かった 九六%
情報交換は学校経営に生かせる 九七%

最後に、コロナ禍で開催が心配されるなか、担当の常陸太田市校長会による感染予防に向けた対応と運営等の配慮により無事開催できたこと、そして、会員皆様の協力に対して、改めて感謝申し上げます。



創意と活力に満ちた学校経営 〜感染症対策を踏まえた働き方改革〜

行方・玉造中
小野口 吉政

今年度の県東ブロック校長研

特別寄稿



今こそ「すべては子供たちのために」

水戸市教育委員会教育長 志田 晴美

令和二年度の学校は、すべての子供たちにとつて、とてもつらいスタートの連続でした。国は、感染防止対策として「緊急事態宣言」の発令や、公立学校等の「全国一斉臨時休校」の要請等を行い、教育現場に未曾有の事態が生じました。間もなく一年が経過しようとしています。が、今なお終息の見えない地球規模の危機的状況が続いており、ます。

さて、本市においては、今年度から中核市に移行し、最初の若手教員「初任者」研修講座の開講式において、私の持論である「子供たちの安全安心を一番に心がけていただきたい。」との話をしました。子供たちの健全やかな成長には、子供たちが安全安心に学ぶことができる環境が必要で、す。コロナ禍において、子供たちは、様々な不安やストレスを抱えていることが懸念されています。こうした不安を抱えている子供たちにこそ、安心して学校生活を送ることができるよう環境づくりが必要で、す。そして、このような子供たちが抱えている問題には、家族や家庭のことで悩んでいることが多くあります。学校だけでは対応することが困難な場合は、関係機関と連携することで、子供たちの安全安心を守れることが多くあります。そのためにも、子供たちに寄り添い、安心して子供たちを相談できる信頼関係を築いてくれる教員の存在が不可欠です。

「教育は人なり」と言われるように、学校教育の成否は、教員の資質能力に負うところが極めて大きいと言えます。特に、学校教育を巡る様々な課題への対応のために、優れた資質能力を備えた魅力ある教員の育成は喫緊の課題となっております。本市には、情熱をもつて、子供たちと向き合う教員とともに、学校と良好な関係を築いて子供を見守り育ててくださる地域の方々が数多くいて、これらの方々は本市の強みになっていきます。これらの強みを活かしながら、学校と地域で安全安心な教育環境を築き、無限の可能性をもった子供たちを健やかに育てていきたいと考えております。

令和の新しい時代も三年目を迎えます。次年度も、子供たちの安全安心を第一に考え、学校の集団感染防止への対策をより一層講じなければなりません。同時に、教員自らが人間性や創造性を高め、子供たちに効果的な教育活動を実践していくことが望まれます。

「すべては子供たちのために」を合言葉に、学校の教育力を高めるためまね努力を惜しまず確実に前進していく所存です。

修会は、十月十五日(木)「創意と活力に満ちた学校経営」感染対策を踏まえた働き方改革」のテーマのもと、茨城県鹿行生涯学習センターで開催された。

今年度は最初に全体会を開催し、講師として、株式会社 Gentle 代表取締役の中村成博(なかむら まさひろ)先生から「職場のモチベーションを上げるには」本場の働き方改革」というテーマで講演をいただいた。

職場の働き方改革を進めるにあたっては、職場に「魅力」や「誇り」を実感できること、そのためには、職場内のコミュニケーションが円滑で、自分が認められていることを実感できることが大切であること。そして、うまくいっていない時ほど「やり方」ではなく、「在り方」(本質・根幹)を見直し、常に「やり方」を創意工夫していくことで職場



が楽しく感じられ、メンバーのモチベーションが上がっていくという、私たち校長にとつては学校経営の参考になる話をしていただいた。

後半は新型コロナウイルス感染症対策を十分にしながら小学校三分科会、中学校一分科会に分かれて「感染症対策を踏まえた働き方改革」のテーマで研究協議を行った。協議の中では、今回の新型コロナウイルスの感染拡大を通して、これまでなかなか踏み込めなかった学校行事の見直し・改善、会議の在り方、PTAや外部人材の活用、ICTの活用など、コロナ禍の中だからこそ大胆に改善できたなど、各分科会とも活発な意見が交わされた。各校の働き方改革についての特色ある取組等の情報交換も十分に行われ、小中各々が抱える働き方に関する様々な学校課題の解決に迫る方策や校長の役割について共有することができた。協議の最後にはまとめとして、鹿行教育事務所長 辻野敦子先生、同人事課長 関根康裕先生、同管理主任 田口雅偉先生、同管理主任 坂上有紀先生から各分科会ごとに指導助言をいただき、大変有意義な時間を過ごすことができた。

また、協議終了後は各分科会の協議内容を記録者がまとめ、事務局に提出し、事務局から各市校長会に配布することで管内

の全校長が研修会の情報を共有することができた。

結びに、ご多用の折りにも関わらず、示唆に富んだ指導助言をくださった鹿行教育事務所の皆様、並びに校長会の皆様方へ心より感謝を申し上げます。

やる気を引き出す

魔法の言葉

土浦・下高津小
栗栖 宣博

今年度の県南ブロック学校長研修会は、「やる気を引き出す魔法の言葉」をテーマに、日本ペップトーク普及協会代表理事の岩崎由純先生の講演会を八月二〇日に実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となり、その替わりとして、岩崎先生が執筆された冊子「子どもがやる気になる短い言葉かけ スクールペップトーク」をもとに、各校長が自主研修し、各校で実践することとした。

ペップとは元氣、活力、勇氣という意味である。そしてペップトークとは、試合に向かう選手たちへの監督やコーチからの最後の声かけなど、選手之魂を揺さぶり、やる気を引き出す言葉かけのことで、「短く・わかりやすく・肯定的」という特徴をもつ。「主体性」を大切にしている学校現場に、このコーチング

の手法を用いた言葉による働きかけの有効性を活かそうというのが今回の研修の趣旨である。

各市町村代表校からは、

- ① 校長自らが教職員への接し方を振り返るとともに、普段の指導や教員評価面談の場においてペップトークの手法を活かし、教職員をやる気にさせるような言葉かけをした。
- ② ペップトークに関する校内研修を実施し(写真・石岡市立恋瀬小)、教職員への理解啓発を図り、児童生徒のやる気を刺激する言葉かけを実践した。
- ③ 学級活動の時間などを活用し、児童同士がお互いに相手に対する励ましの言葉かけができるようにした。
- ④ 学校便りを活用し、保護者や地域の方にペップトークの理解啓発を図った。



石岡市立恋瀬小

などの実践報告があった。

これら代表校の実践内容については、事務局で実践報告集としてとりまとめ、全校長に配付し共有できるようにした。

今回は講演会が中止になり、やむなく冊子を配付することによる自主研修という形態をとった。このことについて、冊子をもとに校内研修を実施することにより、「やる気を引き出す言葉について教職員間で伝達、共有することができた。」「校長の研修の本来の意義や目的が達成できよかった。」との意見があった。一方、「冊子では掲載しきれないノウハウや、疑問点など、講師から直接話を伺いたかった。」という声もあった。これらの意見をもとに、次年度に向け新型コロナウイルス感染症や働き方改革に対応した研修の持ち方を検討していきたい。

**創意と自校の実情を生かした
学校経営の研究と実践**

結城・結城南中
黒田 光浩

県西ブロック研修会は、十月五日(木)に県西生涯学習センターで、「創意と自校の実情を生かした学校経営の研究と実践」の研修テーマのもと、県西地区管内の校長一五〇名を集めて実施する予定でしたが、コロナ禍のために全体での研修を断

念して、各市町での研修に切り替えた。

県西ブロック研修会は、例年、全校長がレポートを持参し、小学校三、中学校二の計五分散会を設置し、テーマについて、特に働き方改革に視点を当てた協議を実施し、その後、講演会を開催する内容だった。今年度の研修会中止の判断については、県西ブロック校長会の担当校長を中心に、この状況下で開催するに当たつてのメリット・デメリットを挙げ、他地区の状況を見極めながら慎重に検討を重ねてきた結果である。その代替策として、各市町校長会での研修会を、期間を区切り実施した。各市町校長会での協議内容を県西ブロック校長会としてまとめ、各市町校長会に配付して情報交換を実施した。

県西ブロックでは、今年度から、第十二期長期計画(令和二年度～四年度)として、「働き方改革を実現し、新しい時代の教育を推進する」ことを視点として、研修を実施している。

- ① 学校と地域の連携・協働
 - ② 学校の組織運営改革
 - ③ 教職員の資質能力の向上
- を掲げている。

また、努力点として、
① 家庭・地域の環境を生かした学校経営(学校運営協議会の設置)

- ② 特色ある教育課程の編成と実施(カリキュラムマネジメントの確立)
- ③ 人材育成・学校活性化システムの構築
- ④ 経営参画意識を高める実践研究

以上を推進の柱と努力点の実践により、各校において自発的な働き方改革が図られ、新しい時代の教育が推進されるものと考えている。ただ、令和二年度が休校等で通常の研修ができなかつたため、第十二期長期計画を一年スライドして、令和五年度までの計画に変更する予定である。

今年度の各市町校長会での研修会は、下妻市と八千代町の校長会が連携し、合同で研修会を行ったところもあった。元下妻中学校長中山均先生を講師として「学校経営と働き方改革」というテーマで講話・協議を行い、次年度の学校経営に対して多くの示唆を得たと好評であった。

今後、合理的で効果的な研修会に改革したいと考えている。



ひばり



「逆井城址」
猿島・猿島小 飯田 政子

「自己暗示」

大洗・南小
橋川 三喜枝

よく「晴れ女」とか「雨男」というが、恥ずかしながら私は自称「晴れ女」であると信じている。ということ、今年度の本校の運動会も秋晴れの素晴らしい天気にも恵まれ、子供たちの生き生きとした姿と笑顔がたくさん見ることができた。

冷静に考えれば、「晴れ女」は単に思い込みと幸運に恵まれただけといえるが、広い意味で捉えれば、ルーティンも同じ類いのような気がする。人には、このような非科学的なことも必要なのではないかと思う。信じていることを自分に言い聞かせ、暗示をかけることは、心の落ち着きと前に進む勇気をもたらし。ルーティンといえは、ラグビーの元日本代表の五郎丸歩選手のポーズを思い浮かべる。ただ、あのルーティンは、並々ならぬ努力を積み重ねていく中で自分に暗示をかけ、何度も続けて成功を経験し確信となり、信念に変えていったのだろう。何かを心の支えとしてそれを感じることは、力強く生きていくためには大切なことであると感ずる。

真杉(ますぎ)のように

那珂郡・石神小
平間 克司

本校は東海村北部に位置し、近くには久慈川も流れる自然豊かな環境にあります。明治一〇年に創立され、今年で一四三年という長い歴史と伝統がある学校です。

今年度は、新型コロナウイルスへの対応により例年と異なる部分が多々ありますが、変わらないものもあります。本校のすぐ隣にある住吉神社の境内には、「真杉(ますぎ)」と呼ばれる天高く伸びる杉の大樹が今も数多くあります。この真杉は本校の校歌に、「風道光だ住吉の真杉の上の青い雲 あれがみんなの石神の 子どもののぞみ 元気がよくその胸はつて」という歌詞で登場します。「ますぎ」は学校だよりの名前にもなっていて、子供たちにとってもなじみ深い存在となっています。私の子供たちの様子を写真に撮っていると「ますぎに載りますか。」と聞いてくる子もいます。そんな元気で笑顔いっぱいの子供たちの、真杉のように力強く伸びゆく成長を願い、精一杯支援していきたいと考えています。

今、思うこと

日立・水木小
大江 憲一郎

今年度の二学期の始業式は放送によるものだった。放送室に入ると二年生の女の子がマイクの前に座っていた。その後ろ姿から緊張の気配が感じられた。懸命にマイクに向い一学期の反省と二学期の抱負を語った後で、最後に「私は、コロナにならないようにがんばります。それは大好きな学校に行けなくなるからです。」という言葉で結ばれた。その瞬間、感動で私の頭の中に用意していた「校長の話」は吹き飛んでしまった。まさに、幼い純粋な気持ちで教育の原点をあらためて私に教えてくれた。

私はもうすぐ定年です。今思えば、共通一次元年、採用時は全国的に生徒指導上の課題が山積していた。また度重なる学習指導要領の改訂、そして最後は新型コロナウイルス禍の中の学校運営。いつの時も多様な課題と難局の連続だったように思う。

三年前の辞令交付式で転入者代表の挨拶をした。その中に、先輩や同僚から学んだ事柄も加えたいと、あれこれ思案したことを覚えている。そうするとある共通点が見えてきた。どの先生も人間的な素晴らしさはもとより、「しかけ」が上手かった。ある先生は常に、にこやかで全てを包み込む優しさがあつた。安心した子供は素直に個性を発揮し、生き生きと生活していた。ある先生は、厳しさの中に垣間見る優しさがとても人間味に溢れていた。子供を本気にさせるのが上手かった。果たして自分はどうだったか？

さらに、「つなぎ」が上手かった。子供と子供の「つなぎ」どの子も必ず心地よい居場所があつた。子供と教材の「つなぎ」興味をもち、真剣に学習に取り組んでいた。子供と先生の「つなぎ」どの子にも見配りを欠かさず、小さな変化を見逃さなかつた。そして、子供の悪口は、決して言わなかつた。

もうすぐ任を終える。教員生活の自己採点、これが難しい。

つなぎ役の素晴らしさ

潮来・日の出小
根本 昌浩

一隅を照らす

龍ヶ崎・愛宕中
黒澤 智

関東大会で優勝経験のある野球部やサッカー日本代表の中山雄大選手を輩出した本校は、私が生まれた昭和三六年に開校した。双つの龍とあじさいの花がシンボルの学校である。自分の人生と同じ歳月を歩み、何か不思議な縁さを感じる。

ピーク時は、千名を超す生徒が在籍していたが、現在は二〇〇名を切る。令和四年四月には、隣の城南中学校と統合し、長い歴史に終止符を打つ。そして、新生龍ヶ崎中学校として、新たな歴史を刻もうとしている。私は、これまで卒業式の式辞で「一隅を照らす」という言葉を児童生徒に贈ってきた。卒業しても自分が置かれた場所で一杯努力し、最善を尽くすことの大切さを伝えてきた。

今回は、自分の番である。閉校・統合という重要な節目に立ち会う責任をしっかりと受け止め、龍ヶ崎中学校が円滑にスタートできるような一隅を照らしていきたい。そして、本校の閉校とともに、私の教員生活のフィナーレを迎えることができれば教師冥利に尽きる。

生徒とともに

取手・取手一中
関根 京子

「おはようございます」毎朝、校門に立ち生徒たちを迎える。大きな声で堂々とあいさつをする生徒から元気をもらう。なかなかあいさつのできない生徒がいつもより声が聞こえると、心のなかで「やった!」と思う。

今年度も卒業する三年生一人一人と校長面談をしている。ある生徒が「つらかった時に声をかけてもらってうれしかった」と話してくれた。その時の光景は今でもよく覚えている。いつもと異なる様子に「大丈夫?」と声をかけた。その生徒はうなずいただけだったが、そんなふうに感じてくれた。「その時は、つらいことがあったんだね。今は大丈夫?」の問いに大きく「はい」との返事。嬉しかった。そして、縁あって保護者として新採の時に出会った生徒に再会した。立派な父親になっていた。成長した姿に感動した。

「生徒とともに」歩める教員を目指し三六年。生徒に育てられ今がある。そして、今年度、定年を迎える。生徒たちに感謝の気持ちでいっぱい。



私の参考書

坂東・逆井山小
神吉 哲寛

校長会広報委員会より広報誌の原稿依頼があった。さて、何を書こうかあれこれと悩んでいたとき、過去に執筆した校長先生方は、どのようなことを書いていたのかと思ひ、バックナンバーに目を通した。すると平成二二年度以降の広報誌が、ホームページにアップされていた。そのすべてに目を通すと、過去にご指導いただいた校長先生をはじめ、県内各小中学校の実践や校長先生方一人一人の教育観等が掲載されている。今年度から校長となった私にとっては、懐かしさを感じるとともに、大変参考になる内容が数多く載せられており、感銘を受けた。

教員の世代交代が進む中、教育の質の維持・向上は、今の我々に課せられた大きな課題である。優れた実践例や校長としての心構え等が載せられたこの広報誌は、次世代に引き継ぐ貴重な資料であるとともに、私にとっては、今後の学校経営に生かせる大切な参考書になった。



幸せに!二六人の子供たち

桜川・猿田小
田部井 悦子

地域の象徴として、一四七年の月日を重ねた本校は、まもなくその大役に終止符を打ちます。この一年、全ての教育活動に、子供たちや地域の思いの整理と、感染症対策が求められました。すべきこと、やりたいことをどうすれば実現できるのか。全職員で子供たちの心を見取りながら、一丸となって考え、話し合いました。そうして子供たちの願いを叶えながら、閉校に向け、大きな行事を実現し、

目的を果たしてきました。決断には迷いと苦しさが伴いました。直前に感染が拡大したら?子供たちの心は?職員の健康は?あらゆる想定をしました。地域、市教委、市校長会の理解と支えがあつてこそその教育活動でした。感謝に堪えません。三月三十一日の子供たちの思いや表情を考えると胸が一杯になります。でも素晴らしい職員が全力で子供たちを支えてきたのです。きつと明るく夢に向かって、力強い一歩を踏み出すでしょう。学校経営を一から学んだ猿田小の日々。全児童二六人の幸せを祈り、応援し続けます。

読んでみませんか

『伸びる子どもは〇〇がすごい』

著者 榎本 博明
出版社 日本経済新聞出版社

「読書は手段であり、目的ではない」これは、先人の言葉である。コロナ禍で、人と話をするのが難しくなった今、気分転換や自分の課題を解決するために本を読むことが多くなった。本書は、子供たちに生きて働く力を身に付けさせるためのヒントが得られればと思ひ、題名に惹かれて手に取った。『〇〇』の部分には「非認知能力」が当

てはまるのだろう。自己コントロール、つまりは、自分の感情をうまくコントロールできるかが大切というところに共感を覚えた。そのためには子供時代の過ごし方が重要である。これからの予測不能な時代を生きていく子供たちのために、学校は、もつと子供の力を信じ、失敗して傷つくことを恐れずに成長を促せるような教育に尽力しなければならぬと思つた。新たな視点で今年度を見直すきっかけとなった一冊である。

常陸太田・菅田小
石川 尚子

梅のかおり

—先輩校長から—



教えられ、育てられ…



前・水戸市立
見川小学校長
深見 晋

新採の年に、授業を公開することとなり、悩んでいると、校長から「小料理屋〇〇へ来るように」と電話が入りました。恐る恐る行ってみると、「これはどうだ」と、ある教材を紹介されました。目から鱗でした。見たことのない、魅力たっぷりの教材に驚きました。教材研究は大事だと強く感じました。学校を離れた今、教師生活を振り返ると、新採から退職までそれぞれの地で、先生方から教えられ、育てていただいたことが次々と思ひ浮かびます。感謝の気持ちでいっぱいになります。いつの時代でも、学校教育の鍵を握るのは教師です。だから、教師を育てるといふことは、学

校経営において、欠かすことのできない視点であり、譲ることのできない取組であると思えます。

現在、新型コロナウイルスの感染が収まりません。「働き方改革」という喫緊の課題もあります。これまでどおりにはいかないことばかりでしょう。このような中にありながらも、教師と教師のかかわりが薄まることなく、これからも、教師間で教える、教わる姿、育てる、育つ姿が、学校のあちらこちらで見られるようになってほしいです。

「親バカ」は許せるけれども「バカ親」はどうにもならない



前・笠間市立
友部中学校長
西野 勝美

このタイトルは、ミュージシャンの「さだまさし」のことばである。さらに、彼は次のように付け加えている。「親バカ」からよい子が育つことはあっても、「バカ親」からはバカな子しか育たないのです、と。

私はこのさださんのことばにはっとさせられた。「親バカ」と「バカ親」、このことばの意味の重さを知った私は、保護者への見方が変わり、保護者に対

する助言も上からの目線ではなく寄り添う言い方ができるようになった。なぜなら、私もかつて「バカ親」の一人だったと気付いたからである。私は、自分の子供が幼いころから、子供のためというよりも自分の満足や欲求を満たすためにとつた親として恥ずかしい振る舞いがいくつかあった。しかし、言い訳がましいが、他人の子供が悪さをすると腹が立つのに、自分の子供がすると許してしまう、そこまではならずに済んだことが唯一の救いだと思っている。

家庭教育の重要性が問われる昨今、保護者自身が「バカ親」なのか「親バカ」なのかを考え、区別ができるように保護者の言動に寄り添いたいものだと思つて強く感じている。

先生が育つ職場環境を



前・常陸太田市立
太田小学校長
西連寺 有

今年の三月に定年退職し、四月から常陸太田市教育委員会の学校教育指導員として、会議等へ出席したり、学校訪問に同行したりと学校教育に関わっています。

現役を退きますと心に余裕が

出てきたのか、かつて目尻をつり上げて参観していた授業も「頑張れ」と応援する気持ちになつてきました。その中でも経験年数が少ない先生方が、もがきながら、悩みながら一生懸命に授業をしている姿はとてもいいものです。

先日、教え子の授業を見る機会がありました。教職についてまだ一〇年経っていませんが、教壇に立つ姿は自信に満ちて凛々しく、子供たちと上手にかかわりながら、授業を進める姿に感心しました。同じ頃の私など比べものにならないくらい立派でした。きっと多くの先生方から良い助言を受け、そして様々な経験をしながら成長してきたのだと思います。

このように、先生を「育てよう」とする環境がある学校に勤務する先生は幸せだと思います。どうぞ校長先生が中心となつて環境をつくり、厳しくも温かいご指導により、先生方を育てていただきたいと思います。

雑感…日々感謝…



前・鹿嶋市立
平井中学校長
小原 俊弥

多くの方々への感謝を心に刻

み退職を迎えた。人生の方位磁針は明確に定まらず川に流される石のような心境であった。

四月から幼稚園勤務になった。始業式・入園式から二か月あまりの休園の間に、草刈り・ペンキ塗り・柵作り・網戸修理など出来る限りの仕事に取り組んだ。同時に我が家の大掃除も進んだ。当時、同様の行動をする方が多かつたのか、ホームセンター道具コーナーの会計は長蛇の列であった。元来、私は形から入るタイプゆえ、自分用の様々な道具が急激に増えていった。

六月に園再開、園児とのふれあいは新鮮な驚きと喜びに溢れていた。私の課題は幼稚園の中では還暦を過ぎた新人であり、職員の方々に助けられて勤務している現状である。「遊び」が育てる「学び」の未来を念頭に、幼児教育と小学校教育をつなぐ橋渡し役となるよう微力ながら尽力したいと思っている。

現在の自分の置かれた環境に感謝しつつ、仕事面では初心に戻って「日々研修」を意識して取り組みたい。さらに公私両面のバランスを大切にしながら、自分自身の心技体の向上を図りたいと考えている。



今思ひつゝ



前・牛久市立
牛久第三中学校校長
柴崎 卓也

三月三十一日に無事定年退職を迎え、改めて先輩、同僚、保護者・地域の方々の支えがあつて勤務出来た三八年間だったと感謝の気持ちで一杯です。

また、家族の支えなしにも勤め上げることが出来ませんでした。同じ教職に就いている妻の理解と協力には感謝の言葉しかありません。

四月から牛久市で拠点校指導員として新採職員六名の成長のお手伝いをしています。指導員として勤務するに当たり、次の目標を立てました。

「笑顔で一年間を乗り切り、二年目に意欲的に取り組もうとする教員の育成」

校長時代にも人材の育成には力を注ぎ、特に組織で人材を育てる職場作りを進めました。今は、一日ほぼ一緒にいて研修を進めています。授業や学級経営の様々な場面で、児童生徒の表情や様子を観察し、そこから見とれるものを教員にフィードバックし話し合い、先生方の授業力向上のお手伝いをしています。

講師経験の長さの違いはあつても、教員になり意欲的に教育活動に取り組み新採の先生方の成長を楽しみに今の仕事に取り組んでいます。

新たなスタートへ



市立
つくば市長
要小校長
青葉 正之

今年度、文部科学省より委嘱を受け、在外教育施設派遣校長として、アメリカ合衆国デンバー日本語補習学校に赴任することになった(八月三日着任)。

本来であれば、四月当初の赴任となるが、今年はコロナウイルスの影響があり、アメリカへの渡航が認められず、日本からオンラインを使った現地との各種会議や職員研修、ラインやメールを活用した情報交換等を行うスタートとなった。

本校は、園児・児童・生徒総数百二〇名程が、毎週日曜日のみ通う学校である(通常子供たちは、週五日現地校に通っている)。また、本校で勤務する教職員は、全て現地採用の日本人スタッフであり、日々本校の子供たちのために、誠心誠意職務に専念してくれている。

近年「グローバルな人材育成

の視点」において、補習授業校の役割が重要視されている。本校で学ぶ子供たちには、ぜひ将来日本とアメリカの架け橋になるとともに、自己に誇りと責任をもち、様々な国の方々と協働するなど、主体的にたくましく生きる『グローバルな人材』として、世界に大きく羽ばたいて欲しい。輝かしい未来に向けて！

校長になって改めて痛感



市立
下妻市長
東部中校長
猪野木 雅明

校長として赴任した学校で、「校長先生、〇〇(生徒の名を呼び捨て)は、授業にも出ずに校内をふらついていて、どうしようもありません。」こんな報告が、毎日のように耳に入ってきました。

このような状況は、どこの中学校でも多かれ少なかれあるのが現状です。私もその報告を聞いて、正直、「〇〇さんたちは厄介だな。」と感じました。でも、生徒たちと関わりをもてばもつほど、この子は、好きで問題行動を起こす子になりました。わけではないと思うようになりました。

保護者や先生の言うことを「は

い。」と素直に聞き入れ、「いい子だね。」と褒められるための行動を懸命にやろうとしていた時期があつたのです。

就学前の保育所や幼稚園の時期、小学生の時期を経て今に至っている中学生たちです。これまでに、学校や家庭で様々な出来事を経験してきたはずですが、もしかすると、目の前の生徒の問題行動の要因の一つとして、我々教師の接し方もあつたのかもかもしれません。

こう考えると、「〇〇は、とてもない生徒だ。」等と、生徒を責める発言は、それこそ、とてもないことなのだと思います。

目の前の生徒も、その言動の背景も、全てをひっくり返して大切な生徒です。学校は、教師は、その責務として、誰一人として粗末にはいけないと、校長になって改めて痛感しました。

コロナ禍の中で



市立
常総市長
石下中校長
佐藤 昭彦

新型コロナウイルス感染防止による全国一斉休校措置の中、離任式も送別会もなくひっそりと学校現場を去りました。多く

の制限はありましたが、卒業式が挙行できたことがせめてもの救いでした。三八年の教職員人生の最後としては一抹の寂しさや敵前逃亡するような後ろめたさは正直ありましたが、その後の子供たちや先生方の艱難辛苦に比べれば些細なことです。校長先生方にとつても今回のコロナ禍は、先が見えないばかりか、これまで経験したことのない状況下で学校経営に当たらなければならぬ難しさが多々あるかと思えます。

その一方で従来の対面授業だけに頼らない遠隔教育の導入を視野に入れたICT教育環境の整備促進や、働き方改革の流れと相まって多くの会議や出張の在り方を再考できたことは今回のコロナ禍がその契機となつたと言えるかもしれません。

私も管理職として東日本大震災や関東東北豪雨災害に直面し大変な思いをしましたが、その経験の中には後の学校経営に活かせることも多々ありました。今は校長先生方のご活躍と一刻も早い収束を願うばかりです。



市町村教育委員会と学校長会

中央 ひたちなか市教育委員会との連携

ひたちなか・東石川小
安島 孝博

ひたちなか市校長会は小学校二〇校、中学校九校の計二九校で構成されている。令和三年度からは、五つの小中学校が統合し、義務教育学校の美乃浜学園が開校し、計二五校となる。

毎月一回、定例研修会を開催し、市教育長、教育担当参事、指導課長、担当諸課長から、指導・助言・諸連絡をいただいている。本年度は、次の三点を重点課題として、教育委員会との連携を図りながら、校長会の活動に取り組んでいる。

一 魅力ある学校づくりと働き方改革の推進

平成二九・三〇年度に国研委嘱による「魅力ある学校づくり調査研究事業」に取り組んできた。本年度も、全小中学校において「意識調査」と、それを基にした「計画表（PDCAシート）」を作成し、「児童生徒の「居場所づくり」と「絆づくり」に取り組んでいる。

また、校長会の働き方改革担当を中心に、人的配置や教育課程、作品募集や調査の見直し、今年度導入した校務支援システムの運用等について、市教委との検討を重ねている。

二 コミュニティ・スクールの体制整備

ひたちなか市では、令和三年度から、市内全小中学校でコミュニティ・スクールの導入に向けて、市教委と連携し、体制整備が始まった。

併行して、児童クラブや放課後子供教室等、児童の放課後の居場所づくりについても連携・協議している。

三 コンプライアンス意識の高揚による信頼の構築

定例研修会の中で、市教育長から「体罰・暴言ゼロ運動」に係る指導をいただいたり、教育担当参事から服務規律の徹底に係る指導をいただいたりしている。それを基に、研修部担当を中心に、「体罰・暴言」研修事例集を作成し各校で活用したり、市教委との共催でスクールロイヤーを招いての研修会を開催したりしている。

その他、人材育成として、若手教員指導力向上研修会を指導課との共催で実施している。

今後も、教育委員会との連携の下、様々な課題に組織的に対応し、本市の学校教育振興のためのスローガン「夢 感動 笑顔が広がる教育のまち ひたちなか」の実現に向けて、学校経営に取り組んでいきたい。

北 県

緊密な連携で、コロナ禍から子供を守る

日立・泉丘中
飯島 博昭

日立市学校長会は、小学校二五校、中学校一五校、特別支援学校一校の計四二校で組織されている。

今年度は、「未来を拓く『ひたちっ子』の育成」を活動目標に掲げ、一人一人が輝く学校づくりに取り組んでいる。特に、今年度は、コロナ禍から子供たちを守り、持続的に児童生徒の教育を受ける権利を保障していく観点から、市教育委員会と緊密な連携をとっている。

コロナ禍対策を講じるに当たっては、教育長及び教育委員会の関係部署と校長会代表者との協議の場をもち、児童生徒にとってよりよい学習環境を提供すべく、その整備に努めてきた。

一 感染症予防における連携

臨時休校明けの学校再開にあたっては、各校長が抱える感染予防に対する不安や疑問を校長会として集約し、二〇項目に及ぶ質問・要望を市教育委員会に提示し回答を求めた。これに対し、五月に開催した臨時学校長会議において、一項目ごとに丁寧な回答を受け、全校の共通理解のもと、先が見える形での学校再開となった。

また、有償ボランティア配置による校内の消毒作業、学校の要望に沿う感染予防物品の配付など、学校が抱える課題を教育委員会と共有し、感染防止に努めてきた。

二 熱中症対策における連携

感染拡大を防ぐために「新しい生活様式」を実践することが求められている。臨時休校の影響から、夏休みが短縮され、猛暑の中で学校生活を送る児童生徒には、感染防止とともに熱中症予防も大きな課題であった。

そこで、教育委員会主導のもと、各学校の実態と要望等に即し、次の対応がなされた。

- 校種に応じた日課の設定
 - 九月末まで毎日、児童生徒にペットボトルを配付
 - 大型冷蔵庫・製氷機の設置
 - 大型扇風機・冷風機の配付
- 以上が、コロナ禍から子供を守るため、教育委員会と校長会が連携してきたことである。

本市では、「学ぶ夢みるそして輝く」をスローガンに、日立らしさを活かした教育で、子供たちの夢や目標の実現に向けた教育を推進している。今後も、子供たちの笑顔と元気があふれる日立をめざし、教育委員会と連携を深めながら取り組んでいきたい。

編集後記

コロナに始まった令和二年度も各学校の校長をはじめ教職員の努力があり、地域と連携しながら子供たちの笑顔が学校に戻ってきたのではないだろうか。

まだまだ油断はできませんが、すべては子供たちのために、当たり前に学習に向かえる学校づくりを目指すことの大切さを再確認できたと思います。

ご多用の中原稿をお寄せくださいました皆様に感謝申し上げますとともに、皆様のご健康とご活躍を祈念いたします。